

写真で見る浪曲人生

# かすがい・ばいあう 春日井梅鶯

第一回

## 「恩讐を越えてたどり着いた 芸と父への愛」

文・おさだ衛



かすがい・ばいあう本名・安藤和子。昭和2年9月2日生まれ。父・初代春日井梅鶯の浪曲に感動し、父に入門する。昭和26年、春日井加寿子(かすこ)としてデビュー。昭和50年、二代目梅鶯を襲名。現在、日本浪曲協会・副会長。この写真は昭和18年、松蔭高等女学校時代、16歳。父・初代梅鶯は38歳。東京は麻布の自宅まで。梅鶯は最前線のビルマに慰問に行った。

①

親子二代の芸豪。親は子を可愛がり子は親を慕うものだが、芸人となると芸を挟んで確執が生まれるようだ。

「先代は私を娘というより芸の上のライバルと思っていました。芸人の業なんです。同じ舞台に立つものに負けてなるかという気持ち私や周囲にむきだしにしていましたね」

昭和26年から13年間、先代・梅鶯と二枚看板で全国を巡業し、実力を付け人気もウナギのほりだった。

「13年間、父と共にやってきました。年齢も35歳近くになり、父に自分の価値を上げるためにも他流試合がしたいと意を決して申しでたのです」

起こすことが必要と、娘の春日井加寿子は考えたのだ。

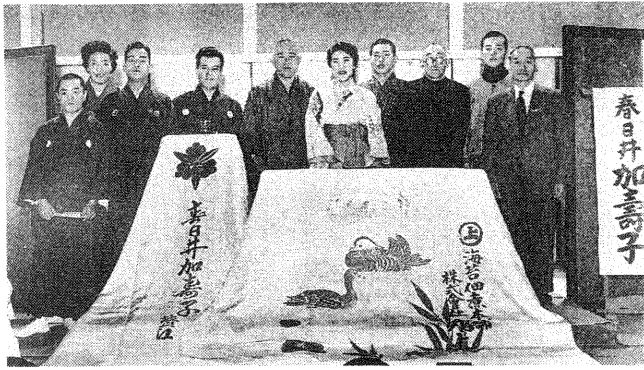
「芸を持ち、芸に生きる人間は自力で勝負したいんです。父の答えは、お前ひとりを買ってってくれる興行師はいないぞ。一本立ちしても味噌汁と漬物でしか食えないぞと許してもらえませぬ」

娘の独立に強硬に反対する父に、「私は思わず、お父さんは私を興行師が買わないように育ててくれたんですかと抵抗しました。そうしたら、今までの恩義がわからないのかと激怒し、勘当だ。とったんです」

昭和37年のことだった。父からの「餞別」はわずか2万円だけだった。「実の父親でありながら、こんなに冷



昭和26年、沼津にて。「この頃から春日井加寿子で、父との二枚看板でした。12月25日には翌年の年間スケジュールが全部、決まるような生活が昭和41年まで続きました」



昭和28年のテーブル掛けのお披露め。写真中央の春日井加壽子の一人おいた右隣りは駒井勝(こまい・かつ)。帝国演芸社という芸能プロダクションの社長。先代や二代目梅鶯を売り出した恩人だ。



昭和26年、新東宝映画『情炎峡』に出演した初代梅鶯。セリフは少なかったが、堂々たる押し出しだった。



父と決別したあとは「春日井加壽子ショー」で全国を巡演。独力で芸を磨き親娘二代の芸豪と謳われる。

たい仕打ちをするのなら、私は石にかじりついても、お父さんに助けは求めないと心に堅く誓いました」

父・初代梅鶯は昭和49年、腸閉塞と心筋梗塞のために69歳で急死するが、最後まで親子の交流はなかった。

「やつと近頃になって、父のことを振り返られるようになりました」

娘の目から見た父親像は、

「私が浪曲で舞台上立つまでは蝶よ花よと、大事にされました。やさしい父で、愛情を注いでもらいました。

父は男前でしてね、若いころはハーフというか外人ふうに見えて、女性には大変なもてかたでしたよ」

遠く昔の追憶をたどるように梅鶯師の話は続く。

「先代の芸は見事でした。声が素晴らしい。声量があり音域が広く音程がしっかりしていました。日本中どこでもすごい人気で舞台上に登場するとお客さんが競って『大統領』『たつぷり』『日本一』と声を掛けました。東劇や明治座の舞台が目につかびます」

先代からは様々な教えを受け、そのひとつひとつが血となり肉となった。台本を大切にしろ。三味線をリードする実力をつける。女の姿で男の声を作れ、その無理を客は喜ぶ、などなど。

「礼儀作法は先代は厳しかったですよ。先輩に対しては礼を尽くせ、口答

えは絶対にするなど教えられました」

一代の英傑である父親を最近は、いとおしく思えるようになった。

「父は稼いだお金はすべて使い切りました。宵越しの金は持たないが信条でした。お酒をたくさん飲んで取り巻きに祝儀を切って遊ぶだけ遊んで、豪快でした。死んだときは一銭もなかった。生命保険にも入ってなかったんです。

それでも私には芸と、いま住んでいる家は残してくれました」

現在は先代に感謝の気持ちしかないという梅鶯師は、

「こうして生活できるのも先代のおかげです。先代の墓を守るのが私の務めですよ」と、さわやかに笑うのだった。

(以下、次号)

**浪曲**… これほどすばらしい芸は他にはないと  
 46  
 52  
 思います。  
 浪曲家の皆さん…頑張ってください。  
 多くのファンを楽しませて下さい。

新小岩 坂本病院院長 坂本 豊 吉